

「散髪代が千円になったらわしも助かるけど、あんまり速くやつてもらおうと今までのように話はゆつくりできんようになるの」

徳平は白いクセ毛のぼさぼさ頭を月に一度「山本理容店」で切ってもらっている。その時に隼人の母親と話をするのが実に楽しい。若いきれいな人は見ているだけでも本当に気持ちがいい。この年で未亡人になるとは気の毒なことである。

「ところで隼人君はこの春にはとうとう小学生になったの。いやー、子どもの成長は早いもんや。以前はかけっこもわしの方が速ようて隼人君はすぐに転んでしもうとつたが、今じゃ追いつきやせんだろうて。わしの方がすぐに転ぶわの」

隼人の母親は苦勞を忘れたかのように、「ほほほ…

「そのうちに買ってあげようとは思っているんです。友だちの航平君のところもまだ買ってもらってないようですし、ウチの子にも、もう少し我慢してもらおうと……。ええと、すみません、その人参、玉ネギ、じゃがいもをくださいな。八百徳さんのところの野菜は安くて助かります」

「その代わり、この爺と同じくしなびているのが」野菜を自転車の後ろに括りつけたダンボールの中に入れてから、隼人の母は西の方角の昨日橋に向かって去って行った。

細身の upper の背筋を伸ばした姿を見遣りながら、(若いのによく商売のことを考えとる)と感心し、(わしはなんの工夫もせずに客が来ないのを焦った。隼人の母親のように商売のやり方を変えてみる

…」と切れ長の目をさらに細めて控えめに笑った。

「八百徳さんとはよく遊んでもらいました。隼人の子守りをしていただいたおかげで私、どんなに助かったか」

「いやいや、わしの方が遊んでもらうとつたみたいなものや。ところで隼人君は小学生になったら自転車を買ってもらえると喜んでつたが」

この言葉を聞いて微笑んでいた隼人の母の顔がさつと曇った。哀しそうにさえ見えた。徳平はつい(もしも手元不如意であるなら、わしが入学祝いに買ってやってもいいが)と、とんでもなく失礼な言葉が舌先まで出かかり、またあわててその言葉を飲み込んだ。これ以上失言して母親の誇りまで傷つけてしまつてはいけない。気分を変えるような口調で隼人の母は言った。

という前向きな姿勢がなかった)と反省した。そしてふっと、徳平は原点に還つてもう一度、祖父から何度も聞かされた大根漬けをやってみようかと思つた。というのも八百徳はもともとは祖父が始めた漬物屋から出発した店だったからだ。

徳平の祖父は戦前に農業の手伝いをするかたわら、借りていた畑で野菜を作っていた。困るのはいつも大根が家族では食べきれないほど余るのである。この余った大根をどう利用しようかと考えた末、見様見まねで大根の漬物を作つた。

秋に収穫した大根を手で曲げても折れない程度に乾燥させて塩糠に入れて漬け込むのだ。ものすごく塩辛く、またカリカリとした噛み応えがたまらないと次第に評判をよんだ。一時は四斗樽を店に三つ置いて

いた。樽ごとに漬け込む期間を違えて塩辛さを加減したものだ。

祖父は小さいながらも本格的に漬物屋の店を構えたのだが、店を持ってみると大根の漬物だけでは生計が維持できないことがわかり、畑で取れるほかの野菜も売った。もちろん祖父の大根漬けは評判がよかったが、そのうち漬物屋より八百屋としての商売の方が忙しくなってしまう、店に顔を出すようになっていた徳平の父と相談して八百屋の商売を主とすることにした。屋号も「つけもの屋」から「八百徳」にかえたのである。その頃から徳平の父親が祖父に代わって主として店を切り盛りするようになっていた。

やがて祖父に待望の初孫が生まれ、名前を徳平とした。初孫が男の子だったことに喜んだ祖父は知り合

いの大工に頼んで、檜の一枚板で立派な「八百徳」の看板を作ってもらったのである。だから看板の年齢も徳平と同じ年の七十四歳ということになるのだ。

この看板を祖父がどんなに大切にしたらは次のような逸話がある。

太平洋戦争中のことだ。昭和二十年に入り、本土が米軍の空襲にあつて都市が次々と焼け野原になっていった。この地方都市高海市においても六月頃から警戒警報や空襲警報が頻発するようになった。この頃から徳平の祖父は毎夜、看板を抱いて寝るようになったのだ。

徳平の父はすでに召集されており、留守を預かる一家の主として責任を一身に背負っていた祖父は、警報が鳴るたびに横五十センチ、縦一・五メートル、厚

さが三センチの重い縦書きの看板を担いで防空壕に入り込んでいた。当然、狭い防空壕に入っている人たちからその看板は大いにひんしゆくを買った。祖父が防空壕の中で少し動いたときにその看板で誰かの頭を小突くからである。しかし周りからの不平不満をもとめせず、祖父はその看板を手放さなかった。

祖父は貧農の十男坊だった。猫の額ほどの借りた畑を耕し、自分で工夫した大根漬けで漬物屋になり、小さいといえども八百屋「八百徳」の店を持った男の矜持だったのだろうか。それともその看板を当時、出兵していた徳平の父や孫の徳平の御守りのように思っていたのかは定かではない。

高海大空襲は昭和二十年七月四日の深夜に訪れた。いつものように祖父は看板を抱いて寝ていた。そこに

突然、焼夷弾が雨や霰となつて降り注いだのである。いざとなると日頃から励んでいた消火活動訓練や避難訓練などは少しも役には立たず、人々は慌てふためいて逃げ惑った。そこら中でぼんぼんと火の手が上がった。

祖父も「これは本物や」と我を忘れて、抱いていた看板を放り出して徳平の母と防空頭巾をかぶった徳平と共に東の方角に向かって逃げた。その途中で祖父は看板を置いてきたことを思い出してしまい、二人に、「走れ、東に向かって走れ。万代橋の方や。わしもすぐに追いつくから」と言つて、来た道を引き返した。

「じいちゃん」という母の絶叫と徳平の泣き声を後にして祖父は看板を取りに帰った。それが祖父の最後であつた。

徳平の母親は舅の言いつけ通りに東の方角に逃げ、万代橋を渡って走り、同じ商店街の仲間の栄屋の親戚の家に駆け込んで助かったが、看板を取りに行つたまま音沙汰のない舅のことが気がかりでしかたがなかった。

次の日に、栄屋のおかみさんと一緒に母は万代橋を渡って夕焼け通り商店街に向かおうとした。商店街の東側の数軒の店は奇跡的に助かっていたが、後はすべて焼け落ちてるのがわかった。

「ああ、お店が……」と母と栄屋のおかみさんはその場にしゃがみ込んで泣いた。泣きながらも現場に行こうと立ち上がったが、焼夷弾が残したものすごい熱気とくすぶり続ける煙と凄まじい悪臭のため、商店街に入ろうとしてもそこからは一歩も進むことはできな

った。

母が舅を見つけたのは空襲があった三日後のことだった。舅は焼け落ちた店の前で看板を下に抱えて倒れ、こと切れていた。

店が焼け、舅を亡くした母は、いつまでも栄屋の親戚に世話になることはできないと、小さな荷車を借り、そこに舅の形見となつてしまった一部が焼け焦げた看板を載せて徳平と共に歩いて田舎の実家に疎開したのだった。

空襲後の数日間を一緒に暮らした徳平と同年の栄屋の栄治は、日頃から毎日商店街で遊ぶ仲であったが、さらに深い友情を感じ、「絶対、また会おうな」と誓い合った。

徳平は疎開していた田舎で終戦を迎えた。

(以上1月30日放送分)